

## 科学読み物講座

身近な自然は、  
ふしぎがいっぱい！

講師：高柳 芳恵

（『どんぐりの穴のひみつ』著者）

前年度に引き続き、講師に高柳先生をお迎えし、科学読み物講座を開催しました。実行委員4名で企画や進行について検討を重ね、2回の実行委員会を経て準備を進めました。



## 1 身近な木の実も、よく見ると…

木の実で一番身近なのは、「松ぼっくり」と「どんぐり」ですが、案外知られていないことが多いようです。

何年か松ぼっくりを観察して気づきましたが、地面に落ちた松ぼっくりには、芽が出るような熟した種がありません。松ぼっくりは、11月頃茶色くなり、開くと中の種が下に落ちてしまいます。ですから地面に落ちた松ぼっくり自体には、種が残っていないのです。

『びっくりまつぼっくり』（多田多恵子ぶん 堀川理万子え 福音館書店）は、読み聞かせによく使われます。この本から、松ぼっくりは濡れると閉じて、乾燥すると開くということがわかりますが、そこに、「開いたり閉じたりするのは種を飛ばすため」という自分の体験したことをプラスして読むと、子供にぐっと伝わります。

以前行った遊ぶ会では、『どんぐりころちゃん』（みなみじゅんこ作 アリス館）を読み聞

かせた後、用意しておいたいろいろな種類のどんぐりをみんなで観察し、どんぐりの形も帽子も違うことに気づいたところで、『こならぼうやのぼうし』（八百板洋子文 高森登志夫絵 福音館書店）を読みました。

また、『どんぐりをおとしたのはだれ？』（高柳芳恵ぶん はたこうしろうえ 福音館書店）は、私の体験をそのまま本にしたものです。「誰が落とされたのかな？ よく見ると穴が開いているね。虫が卵を生んだんだよ。」と言ってどんぐりを割って見せると、好奇心いっぱいの子供たちは、虫を怖がらず、触りたがります。

この本をまず読んでから、「虫が卵を生んでいるどんぐりを拾おうか」と言うと、それまで見向きもしなかった汚れたどんぐりを探し、「虫をみつけた」と喜びます。面白さを共有する場があれば、子供は虫嫌いにはなりません。体験していれば、気持ちが悪いとも思いませんよ。体験なくして想像力は生まれません。「ぜひ本物を見てほしい」最近その思いが、ますます強くなりました。

自然科学の本を読み聞かせに使う場合は、実際に見たくなるような読み方が必要です。

## 2 読むことと体験すること

『おちばシャックシャック』（高柳芳恵文 なかざわまさこ絵 福音館書店）も、幼い娘が落ち葉の音を表現しながら歩いていた体験を本にしました。

落ち葉の音を追いかけていたら、落ち葉の分解速度が木の種類によって違うことに気づきました。同じ「葉っぱ」でも、多様性があります。何でも一様ではないのですね。

『かぜフーホッホ』（三宮麻由子ぶん 齊藤俊行え 福音館書店）は、音の表現が難しいので、ぜひ実際に風の音を聴いてから読んでください。竹に耳をつけてみると、中の空洞によって思わぬ音が聴こえます。また、この本には、けやきの落ち葉の音が2種類ででき

ます。それは、けやきの落ち葉に、種のついでいるものと、ついていないものがあるからです。この本は絵でも、ふたとおり描きわけてあります。

知らないで読むのと、知って読むのとでは大違いです。ぜひ自分の中でイメージを描きながら読んでください。言葉を実際に体験しているかどうかが肝要です。イメージして言葉を出せば、それは子供に伝わります。自分の体験を絵本に重ねていくことが大切です。

木の性質は、みんな違います。どんなものにも個性があることがわかると、見る目が平等になってきます。自然に触れるとは、そういうことだと思えます。



### 3 一冊の本から広がる世界

『さくら』(長谷川摂子文 矢間芳子絵 福音館書店)は、さくらの一年が書かれている本です。ここでは、スズメとヒヨドリが蜜を吸っていますが、吸い方が違いますね。そこで『みぢかなとりのずかん』(大島英太郎/作 福音館書店)の出番です。くちばしの形が違うので、蜜の吸い方も違うのです。図鑑も、こうして読み聞かせに使うことができます。

また、桜の花びらの色は、だんだんと白からピンクに変化しますが、『さくら』では、それがきちんと表現されています。

「今日は小鳥になろう」と言って、子供たちと桜の蜜を飲んだことがあります。そんなに甘いものではありませんが、小鳥の気持ちになるのか、「おいしい」「あまい」と喜んでいる姿に、思わず笑ってしまいました。

科学の本は、一冊でいろいろな楽しみ方をすることができます。「どうしてかな？」と考える楽しみがあるからなのです。

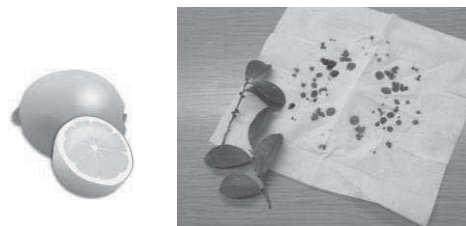
『たべられるきのみ』(菅原久夫文 高森登志夫絵 福音館書店)と『はたらきありさん』(久保秀一写真 七尾純文 偕成社)のような本を並べて置くのも良い方法です。子供たちに「見てみよう」という気を起こさせる、きっかけ作りとなります。

### 4 「科学あそび」をしてみましょう！

「ヒサカキ」という木を知っていますか？神社で玉串として使われている木です。その実をティッシュで挟んでつぶしてみてください。広げると、きれいな模様ができあがります。折り方によって模様が違います。

幼い子供でも、実を取ってティッシュに挟むことはできます。お母さんがつぶして広げて見せると、子供はとても喜びます。そこにレモン汁をかけると、色が鮮やかに青から赤に変わります。ここでヒサカキの出でくる『ぼくはたね』(甲斐信枝さく 福音館書店)を読んで、本に結びつけます。

『ふしぎないろみず』(大竹三郎著 岩波書店)は、出版年は古いですが、いろいろな実験ができるよい本です。実験する時には、できるものとできないものと、両方を用意しましょう。「できないのはどうしてだろう？」という疑問を与え、うまくいくものとうまくいかないもの、両方を体験させてください。



科学絵本を読む時には、どうぞ絵をじっくりと見てください。画家は、虫一匹描くにも目的を持って描いています。

科学の本の面白さは、ストーリー以外のところにもあります。絵を「見る」ことによる様々な発見と楽しさが、たくさん詰まっているものなのです。